

2025 年 6 月 15 日 市川福音キリスト教会（詩篇 37 篇 3～6 節）

私たちはキリストのもの

I コリント 3 章 18～23 節

はじめに

先週は 3 章 16～17 節から、私たちは神の宮であることを学びました。ちょうどペンテコステでした。エルサレムの神殿に皆が集まって来る時代から、聖霊を宿す神の宮である信徒と教会が世界に出て行く時代が始まったのです。これが今も続いていることを「あなたがたは知らないのか」、これがパウロの問いかけでした。神の宮としての皆さんの一週間はいかがだったでしょうか。

さて今日は 3 章の 18～23 節です。コリントの教会には仲間割れがありました。パウロはその原因として「知恵」をめぐる問題を挙げました。人の知恵ではなく、神の知恵によらなければならないというのがパウロの主張でした。人の知恵を誇ることから仲間割れが生じ、神の知恵であるイエス・キリストを誇ることで教会は一つになるのです。

今日はこうした一連の教えのまとめです。まず、1 章 18 節から 3 章の終わり、今日の箇所までを大きく捉えたいと思います。

1、 1 章 18 節から今日の箇所まで

1 章 18 節「十字架のことは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です」

ここが始まりでした。ここで、パウロはイザヤ書 29 章 14 節を引用して「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と、聖書的根拠を示しました。パウロの論じ方は、このように必ず聖書を根拠にしています。今日の 3 章 18 節、一連の教えのまとめのところでは、どうでしょうか。

18 節「だれも自分を欺いてはいけません。あなたがたの中に、自分はこの世で知恵のある者だと思ふ者がいたら、知恵のある者となるために愚かになりなさい。」

パウロはここでも聖書に根拠を求めます。3 章 19 節、20 節です。

19 節「なぜなら、この世の知恵は神の御前では愚かだからです。『神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえる』と書かれており、」とここではヨブ記 5 章 13 節を引用しています。

さらに続けて 20 節では、詩篇 94 篇 11 節を引用してこう言います。「また、

『主は、知恵のある者の思い計ることがいかに空しいかを、知っておられる』とも書いています。」

このように、パウロは1章18節に始まり3章20節に至る、知恵をめぐる語りかけを、聖書で始め聖書で結んでいるのです。

聖霊の宮であるパウロの頭の中、心の中では、いつも神言葉が響いているのです。神のみこころを知るために聖書を読み、それを思い巡らせて祈り、また聖書を読む、生活の中でそれを思い巡らす。このような神との交わりを持つ者であり、教会でありたいと思います。

2、この世の知恵は神の御前では愚か（18～21節）

パウロは16節で「あなたがたは知らないのですか」と問い詰めましたが、ここ18節では言います。「だれも自分を欺いてはいけません」。よく似た言葉で同じような戒めが、6章9節では「思い違いをしてはいけません」、15章33節では「惑わされてはいけません」と訳されています。「自分を欺いてはいけません」とは、「自分を知らなければならない」という意味です。

ソクラテスは「なんじ自身を知れ」と教えましたね。「無知の知」、知らないことを知ることが知識の初めだと言いました。知れば知るほど、知らないことが分るというのです。今はインターネット、さらには人口知能であらゆる情報を得られるような気持になる時代です。「無知の知」という自覚はますます大切でしょう。

聖書は「主を恐れることは知識の初め」（箴言1章7節）と教えます。ソクラテスは人間のあり方を教えました、聖書は神との関係における人間のあり方を教えます。

神を恐れることを忘れ、自分が神のようになろうとしたことが罪の始まりでした。以来、人間は自分の知恵で神に至ろう、いや神を越えようとするのですが、バベルの塔をいくら高く積んでも、神に至ることはないのです。むしろ、神から離れて行くばかりです。

1章30、31節でパウロは言いました。「しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになられました。『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためである」。

3章21節でもパウロは言います。「ですから、だれも人間を誇ってはいけません」。「誇る者は主を誇れ」なのです。

しかし、ここでパウロは1章31節を一步進めます。ここに、今日の学ぶべ

きポイントがあります。パウロはここで突然、「すべてはあなたがたのものです」と言うのです。「誰も人間を誇ってはいけません」。やれパウロだ、やれアポロだ、いやケファだとか言っていてはいけない。と釘をさすかと思えば、そうではないのです。

3、すべてはあなたのもの、あなたは神のもの（22～23 節）

22 節「パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また、世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの、」

十字架につけられたキリストのみ！だから、キリストの十字架以外のものはみな捨ててしまいなさい、となりそうですが、そうは言わないのです。パウロは考え方を狭めるのではなく、むしろ広げます

コリントの教会には仲間割れがあり、「私はパウロにつく」という者があれば、「私はアポロに」つくと言う者あるというありさまなのです。これに対してパウロは、アポロではなく私に従いなさい、と多くのリーダーが言いそうなことは一切言いません。そればかりかパウロは、パウロ派、アポロ押し、というように特定の教師について行っただけとはいけません、とも言わないのです。そうではなく、パウロもアポロもあなた方のものではありませんか、と言うのです。狭めるのではなく広げる、イエス・キリストを土台とすると、こういう考え方ができるのですね。

パウロはコリントの教会の礎を定め、アポロは聖書を雄弁に教え、ケファは 12 弟子の一番弟子としての経験を生きいきと教えてくれた。そして、皆が植えたり水を蒔いたりしたのだけれど、成長させたのは神であるとして、神を見上げ、神をほめたたえよと教えるのでした。

これはスケールが大きな教えです。「世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」。あれもだめ、これもだめではないのです。パウロは確信をもって言います。「すべてはあなたのもの」！嬉しいことではありませんか。

これは教会の考え方として非常に大切です。そして、パウロは、こう締めくくります。23 節「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです」

4、私たちはキリストのもの

今朝の説教題を「私たちはキリストのもの」としました。今日の箇所、ある

いは1～3章の学びを振り返り、つくづく思います。1章18節で「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です」と教え始められたことが、ほんとうにわかっているだろうか、と。頭ではわかっているけれど、それがほんとうに身についているのでしょうか。

神、神と言いながら、いつも自分がむくむくと頭をもたげているのではないのでしょうか。私たちは神さまこうしてください、ああしてくださいと、神さまにお願いごとをしますが、私たちはキリストのものなのだ、ということをきちんと身につけたいと思います。今朝は、ぜひパウロの教えのコツをつかんで、神を畏れ、神を誇り、神に依り頼む生き方を身につけたいと思います。神の宮らしい考え方を身につけたいと思います。

今日、教えられたことを確認しましょう。パウロは、人間の知恵や誇りを一つ一つ握りつぶしてゆこうとしません。「パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また、世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもです」

内村鑑三の墓碑には、彼が若き日に留学中のアメリカで聖書の扉に記したことばが記されています。“**I for Japan; Japan for the World; the World for Christ; and All for God**” 私は日本のために、日本は世界のために、世界はキリストのために、そしてすべては神のために。

小畑進はIコリントの註解書において、こう書いています。「これを借用させていただいて、次のように言い換えると、いっそうパウロの響きとなりましょう。“**Japan for I; the World for I; All for I; but I for Christ; and Christ for God!**” 日本は私のもの、世界は私のもの、すべては私のもの、しかし、私はキリストのもの、そしてキリストは神のもの。

「すべては私たちのもの、私たちはキリストのもの、キリストは神のもの」と墓碑に刻むかどうかは別にして、そのように生きて参りたいと思います。

おわりに

「世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」、そして、私たちは「キリストのもの」。これを私たちの生き方の筋の通し方といたしましょう。最後に、少し先の8章6節を読んで終わります。「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。」